

シェクスピアの世界  
I

ハムレット、その他

目次

ハムレット I

- 一、 序
- 二、 熟考
- 三、 結び

ハムレット II

- 一、 序
- 二、 謎の解明
- 三、 素朴な疑問

ジュリアス・シーザー

- 一、 序(概要)
- 二、 プルータスの演説
- 三、 アントニーの演説
- 四、 リンカーンの演説
- 五、 結び

※ 参考文献

ハムレット  
I

例えば、『ハムレット』という作品の中には、いわゆる「……生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ」という非常に有名な「せりふ」が出てきますが、それは、具体的には、一体、どのような「意味内容」になるのだろうか？ それは、なかなか難しい問題ではあるが、ここでは、次のように読み解いてみたいと思う。

まず、ハムレットは、深夜の十二時過ぎ、ちょうどその頃に現われる甲冑姿の「前国王」（つまり「父親」）の亡霊にめぐり遇っては、その「前国王」から、「……自分は、庭園でたまたま昼寝をしている時に、毒へびに噛まれて死んだのではなく、実は、『現国王』（それは『実の弟』であるが、その『実の弟』に、昼寝をしている時に、耳から劇薬を流されて殺されてしまったのだ。だから、自分の仇を必ず討ってくれ！」と頼まれるのであった。その時は、ハムレットは、まさに「復讐」を誓うわけだが、しかし、その後、ハムレットは、果たしてこの「前国王」（つまり「父親」）の亡霊が言っていることは、ほんとうのことなのかどうか判断しかねるわけである。そこで、ハムレットは、いわゆる「……昼寝をしている時に、耳から劇薬を流されて殺されるという内容」の芝居を「現国王」に見せることを思いつき、その結果として、それを見た時の「現国王」の驚きと青ざめた顔の反応を見て、亡霊の言っていたことは、確かに間違いではなかったということ、ハムレットは、はっきりと「復讐」（つまり「父親の恨みを晴らす」方向へと向かって行くという「内容」（ストーリー）になっているかと思う。

つまり、はっきりと「復讐」（つまり「父親の恨みを晴らす」という方向へと向かっていく「前の段階」では、ハムレットの「頭の中」（或いは「心の中」）には、ある種の「躊躇」（ためらい）があり、それは、一つは、「……耳から劇薬を流され殺されたというような事実が、実際にあったのかどうか？」、それを確かめるまではという「躊躇」（ためらい）と、もう一つは、若しも実際に復讐を行なえば、最悪、自分も死ぬことになるかも知れないという「死」（死後）への「恐怖」であり、その「躊躇」（ためらい）から、まさに「……生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ」という余りにも「有名なせりふ」が生じて来るとともに、それをもっと分かりやすく説明をすれば、それは、次のようになるかと思う。——まず、「生きるべきか」というのは、つまり、このまま何もせずに、それは、父親の恨みも晴らさず、ただ黙って生き長らえるような「生き方」を選ぶべきなのか？ それとも、「死ぬべきか」というのは、すなわち、「前国王」（つまり「父親」）の恨みを晴らして、つまり、それは、「復讐」を積極果敢に果たして、最悪、死んで行くような「生き方」を選ぶべきなのか？ その「どちらの生き方」を選ぶべきなのか？ それも、まさに「問題だ」という「意味合い」になるということである。

これは、何も特別なことではなく、例えば、これも余りにも有名な『忠臣蔵』なども、その内容を見れば、それは、まさに「……生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ」という、そういう「大問題」に直面した時の、まさに赤穂の「家臣」（武士）たちの「生き方」の表れ方に他ならないのである。それは、一体、どういうことかと言えば、それは、次のようなことである。——つまり、死ぬに死にきれない「想い」をこの世に遺して死んでいった「主君」（その浅野内匠頭）の「仇を討つべきなのか」（つまり「恨みを晴らすべきなのか」）、それとも、このまま「……黙って生き長らえるような生き方」を選ぶべ

きなのか、残された赤穂の「家臣」（武士）たちの間では、まさに「大問題」になったということがある。そして、多くの「家臣」（武士）たちは、結局は、「……黙って生き長らえるような生き方」を選んだのに対して、大石内蔵助を初めとした四十七士だけは、まさに「……主君の恨みを晴らして、死んで行くような生き方」を選んだということである。むろん、それは、どちらがどうというような問題ではなく、むしろ一人ひとりの「生き方」の問題になるということである。

もちろん、それは、そのような「恨みを晴らす」というような問題だけではなく、例えば、自分の目の前で、まさに「子供が溺れている」とか、自分の目の前で、まさに「誰かがいじめられている」とか、また、自分の目の前で、まさに「誰かが助けを求めている」とか、さらには、自分の目の前で、まさに「不正（犯罪）的な行為」が行なわれているとか、その他、そのような時に、自分は、一体、どういう行動をとったらよいのか。つまり、見て見ぬ振りをして、ただ黙って生き長らえるような「生き方」を選ぶべきなのか、それとも、「危険」（リスク）を冒してでも、人間らしく（自分らしく）生きる「生き方」を選ぶべきなのか。われわれ人間は、毎日、毎日、実に様々な「問題」に直面しながら、自分の「生き方」が絶えず問われているのである。それは、例えば、裁判に訴えられたソクラテスにしても、まさに「……生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ」という、そういう「大問題」に直面した時に、ソクラテスは、「……ただ生き長らえるような生き方」ではなく、むしろ自分の「生き方」を貫いて、従容として毒杯を仰いで死んでいったということがある。

つまり、自分の「中心」にあるものは、まさに「自己愛」であり、誰でも、自分がいかにばん可愛いとともにも、できるだけ「危険」（リスク）は避けて、なるべく生き長らえたいと思っているわけである。それは、それでもつともなことであり、それを責めることは、誰にもできないのである。それゆえ、あとは、一人ひとりの「生き方」の問題であり、百人いれば、百人違った「生き方」があっても何も不思議なことではなく、われわれ人間は、結局、どういう「生き方」を選ぶにしても、また、その結果が、たとえ良くても悪くても、それが、そのままその人の「人生」になって行くということである。——つまり、われわれ人間というのは、毎日、毎日、実に様々な「問題」に直面しながら、その時、その時に、どのように対応したらよいのか？ 自分の人間としての「生き方」が絶えず問われているということである。

## 二、熟考

それでは、もう一度、熟考してみたいと思うが、いわゆる「……生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ」という有名なせりふは、原文では、これも有名な「To be, or not to be, that is the question.」ということになる。そして、まさにこの、「to be」をどのように訳すかが「最大の問題」であるが、まず、「物語」（ストーリー）の推移から見れば、まず、最初の「問題」となるものは、そもそも「前国王」（つまり「父親」）の亡霊が、「……自分は、庭園で昼寝をしている時に、たまたま毒へびに噛まれて死んだのではなく、実は、『現国王』（それは『実の弟』であるが、その『実の弟』に、昼寝をしている時に、耳から劇薬を流されて殺されてしまったのだ」と言っていたが、果たして、そのようなことが実

際に「あったのか？ なかったのか？ それが、まず問題」であり、そして、若しもそのようなことが実際にあったとすれば、今度は、まさに「……このままでいいのか？」（つまり「このまま復讐もせず、ただ黙って生き長らえるような生き方を選ぶべきなのか？」）、「……それとも、いけないのか？」（つまり「このままではいけないので、父親の恨みを晴らして死んでいくような生き方を選ぶべきなのか？」）、その「どちらの生き方を選ぶべきなのか、それが、まさに問題だ」という、いわば二重構造の「意味合い」を持った「内容」になっているのではないかと思う。

そして、その「翻訳文」というのは、当然のことながら、その「訳者」によってそれぞれ異なるものである。そこで、ここでは次の二つの「翻訳文」を参考までに載せておきたいと思うが、一つは、岩波文庫の『ハムレット』（市河・松浦訳）であり、それは、「……生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ。暴虐な運命の矢玉を心にじっと堪えるのと、海と寄せくるもろもろの困難に剣をとって立ち向い、抵抗してこれを終熄させるのと、どちらが立派な生き方か？」と。もう一つは、『シェイクスピア全集』（その中の「ハムレット」小田島雄志訳・白水Uブックス）であるが、それは、「……このままでいいのか、いけないのか、それが問題だ。どちらがりっぱな生き方か、このまま心の中に暴虐な運命の矢弾をじっと耐えしのぶことか、それとも寄せくる怒濤の苦難に敢然と立ち向かい、闘ってそれに終止符を打つことか。……」とある。

さて、どちらの「翻訳文」も、言わんとするその「意味内容」は、それほど変わりはないと思うとともに、それは、結局、次のようなことになるかと思う。つまり、——人間、生きていれば、誰でも、実に様々な「問題や困難」などに直面することになるが、その時に、一つは、「……暴虐な運命の矢玉を心にじっと堪える」という「生き方」と、もう一つは、「……海と寄せくるもろもろの困難に剣をとって立ち向い、抵抗してこれを終熄させる」という「生き方」と、そのどちらが「立派な生き方か」という問題である。まず最初の「暴虐な運命の矢玉を心にじっと堪える」という「生き方」については、シェイクスピアは、次のような例を挙げている。つまり、「……短剣のただ一突で、われとわが身を精算して、すぐにも楽になれるのに、浮世の鞭とさげすみにだれが甘んじて堪えているものか、圧迫者の不正、おごれる者の無礼、はねつけられた恋の痛み、裁きののろさ、役人の横柄、立派な人物がろくでなしの足げにかけられて、じっと我慢している憂目、だれが重荷を背負って、苦しい生活の中で呻いたり汗を流したりするものか？ ただ死、その死の後に来る或る物が恐ろしくて、われわれの決心がにぶるのだ。……」と言っている。つまり、「……死を恐れて、堪えている」のだということであり、それは、結局、できるだけ「危険」（リスク）は避けて、なるべく生き長らえるような「生き方」を選んでいくということである。

一方、もう一つの、「……海と寄せくるもろもろの困難に剣をとって立ち向い、抵抗してこれを終熄させる」という「生き方」というのは、すなわち、たとえ「危険」（リスク）を冒してでも、自分の目の前にある様々な「問題や困難」などに積極果敢に立ち向かっては、その様々な「問題や困難」などの解決を図るという「生き方」であり、その結果、最悪の場合、自分の「命を落とす」こともあり得るということである。——つまり、人間、生きていれば、誰でも、実に様々な「問題や困難」などに直面することになるが、その時に、一つは、できるだけ「危険」（リスク）は避けて、なるべく生き長らえるような「生

き方」を選ぶべきなのか？ それとも、たとえ「危険」（リスク）を冒してでも、自分の目の前にある様々な「問題や困難」などに積極果敢に立ち向かつては、その様々な「問題や困難」などの解決を図るといふ「生き方」を選ぶべきなのか？ それが、まさに「問題だ」ということである。

それでは、ハムレットの場合、一体、何を「迷っている」のか？ それは、まさに父親の「復讐」（つまり「恨みを晴らす」）べきかどうかということであり、それでは、なぜ「迷う」のか？ それは、もし、「復讐」を行なえば、それは、実際に国王を「殺す」ことになる。そして、国王を「殺す」ということは、言うまでもなく、まさに「大罪」を犯すことであり、それゆえ、自分も「生きてはられない」（つまり「死ぬ」）ことになる。若しも「死ぬ」のが嫌ならば、つまり、「生きていたい」（或いは「生き長らえたい」と願うならば、このまま何もせず（つまり「父親の恨みも晴らさず」）、ただ黙って生き長らえるような「生き方」を選ぶしかない。しかし、それがどうしても嫌だと言うならば、その場合は、「前国王」（つまり「父親」）の恨みを晴らして、つまり、それは、「復讐」を積極果敢に果たして、死んで行くような「生き方」を選ぶしかない。――ハムレットよ、お前は、一体、どちらの「生き方」を選ぶのだ？ このまま黙って生き長らえるような「生き方」を選ぶのか？ それとも、積極果敢に「復讐」を果たして、死んで行くような「生き方」を選ぶのか？ ハムレットよ、一体、どちらの「生き方」を選ぶのだ？ そのような「自問自答」こそは、まさに「……生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ」という言葉の、まさに「真意」になるかと思う。

### 三、結び

つまり、人間、生きていけば、誰でも、実に様々な「問題や困難」などに直面することになるが、そのような時に、「危険」（リスク）は、なるべく避けて、できるだけ生き長らえるような「生き方」を選ぶべきなのか？ それとも、「危険」（リスク）をたとえ冒してでも、できるだけ人間らしく（或いは「自分らしく」）生きるような「生き方」を選ぶべきなのか？ それが、まさに「問題」である、ということである。

\*

\*

生き方を

問ふて悩むや

ハムレット



ハムレット  
Ⅱ

例えば、ハムレットの「憂鬱」というのは、非常に有名であるが、それでは、その直接の「原因」は、一体、何かと敢えて問えば、それは、次のようなことである。

まず、ハムレットは、「前国王」（つまり「父親」）を非常に尊敬していた。それは、国王としても優れていたし、また、一人の人間としても優れていた。そして、それに寄り添う「王妃」（つまり「母親」）も嫌いではなかった。それゆえ、ここまでのハムレットの「頭の中」（或いは「心の中」）には、まだ「憂鬱」の感情は、それほどはなかった。ところが、「国王」（つまり「父親」）が亡くなって、一月もたたない内に、「王妃」（つまり「母親」）は、よりによって、アポロンの神と半人半獣の怪物ほどの違いもあると思っていた「伯父」（父親の「実の弟」）と結婚してしまった。そのことが、特に「王妃」（つまり「母親」）への「不信」が、ハムレットの「心」を暗くしてしまった。

それは、次のようなことである。つまり、「……弱き者、なんじの名は、女なり」という、これもあまりにも有名な「せりふ」であるが、その言葉の真の「意味内容」は、次のようなものである。つまり、「……全身涙にかきくれて、父上のなきがらを送って行かれた時の靴がまだ古くもならない内に、あのお母様が、伯父と結婚をしてしまった。ああ、理性の力を持たない獣でさえ、もう少し長く喪に服しただろうに。兄弟とは言うものの、このおれとヘラクレスのように似てもつかない人と、しかも一月もたたない内に、偽の涙の塩が泣きたぐれた目元にまだ赤い色をとどめている内に結婚をしてしまった。破倫の床へあのように素早く急いで行くなんで、全くけしからん罪の早業だ！ よくないことだ。断じてよいことにはならないぞ！ しかし、待て、この胸が張りさけても、おれは黙っていないければならぬ。……」というようにところから生じて来る、まさに「憂鬱」の感情になるということである。

そして、そのような「母親」への不信は、やがて「女性」そのものへの不信へと変わっていく。つまり、「母親が信じられない」ということは、すなわち、「女性そのものが信じられない」ということにもなってしまう。さらに、それは、「人間」そのものへの不信へとどこまでも深まってしまう。例えば、ハムレットは、美しいオフェリアを心の底から愛していたが、そのオフェリアに向かって、突然、「……尼寺へ行き給え。なぜ罪深い人間の子を生み育てたいのだ？ ぼくなどはかなりまっとうな人間のつもりだが、それでも、母がぼくなぞ生まなければよかつたのにと、いろんな罪をわれとわが身に責めることもあるよ。僕は傲慢で、復讐心が強い、野心家だ。そして、この指先で呼べば飛んで来るいろんな悪玉（悪業）を持ち合わせている。（中略）、われわれは、だれもかれも大の悪党だ。われわれの誰も信じちゃいけない。さ、さっさと尼寺に行き給え……。」と。

また、「……君たちは紅白粉というものを塗りまくるそうだね。神から一つの顔をもらっておきながら、もう一つ別の顔をこしらえようとするのだ。君たちは、踊り、跳ねる。おつに気取って歩く。舌たるい物の言い方をする。神の造り給うたいろんなものにたわいもない異名をつける、不品行なことをしながら、『知りません』と言ひ抜ける。よしやあがれ！ おれはそのせいで気が違ったのだぞ……」。つまり、「母親」への不信、それに加えて、「伯父」への不信、もともと好きになれなかった存在ではあるが、それは、国王としても、一人の人間としても、父親に比べれば、アポロンの神と半人半獣の怪物ほどの

違いであり、しかも、そのような「男」に喜んで身をゆだねてしまう「母親」の存在、そのようなことが、ハムレットの「心」をここまで狂わせてしまったということである。もちろん、「狂気」を装っているという部分もあれば、また、「本気」の部分もあるということである。ちなみに、ハムレットが「尼寺へ行け！」と言ったのは、いわゆる「復讐のごたごた」にオフェリアを巻き込みたくなかったということもあるのかも知れない。それだけオフェリアを愛していたということにもなる。

ところが、その後、ハムレットは、「王妃」(つまり「母親」)の居間で、カーテンの裏で蠢く人影を「国王」と間違えて、オフェリアの「父親」を殺してしまう。その結果、オフェリアは発狂して、やがて川で溺れて死んでしまう。一方、フランス帰りのオフェリアの「兄」は、国王から、お前の「父親」を殺したのは、実は、ハムレットだと聞かされて、まさに父親の「仇討ち」がしたいと願う。そこで国王と一計を企てることになるが、それは、国王の「賭け遊び」のなかで、オフェリアの「兄」とハムレットとが「剣で勝負」を行なうというものであり、その時に、剣先には毒を塗り、また、杯には毒を盛って、ハムレットを殺そうと企てるわけである。——やがて、試合が始まり、最初は、ハムレットが「二勝」するが、(それは、相手が良心がとがめて、本気で突けないからである)。その時、「王妃」は、あれは汗っかきだからと言って、「……ハムレット、このハンカチで額をよく拭きなさい」と、ハンカチをハムレットに渡してから、テーブルに歩み寄り、彼の杯をとり上げ、この時、国王は飲むなど止めるが、「……(いいえ)、わたしはお前の幸運を祝って乾杯しますよ」と言って、毒の盛られた杯を一口飲んでしまう。

一方、ハムレットは、相手に力いっぱい突いて来給えと言って、三番目の立合いをするが、結果は、勝負なしで、両者離れようとする時に、相手が、不意に「ほら、一本！」と言って、ハムレットの油断したところを突いて来て、傷を負わせる。ハムレットは、それに激昂して、相手と激しく接近して争う間に相手の剣を奪って取り換える。それを見ていた国王は、「……引き分ける、両人とも逆上している」と叫ぶ。一方、ハムレットは、「……いや、もう一度来い」と言いながら立ち会うが、その時に、王妃が倒れる。宮臣(オズリック)は、「……あつ、王妃さまが！」と言うながら、その「混乱」のなかで、ハムレットは、「相手」(レアティーズ)に剣を刺して、深手を負わせ、その「相手」(レアティーズ)は、やがて倒れる。倒れていた「王妃」も、「……ハムレット、あのお酒、あのお酒！ わたしは毒殺されたの」と言いながら、死んでいく。それを聞いて、ハムレットは、「……」大事だ、陰謀だ、戸を閉めろ、謀反だ、捜し出せ！」と叫ぶが、死にかけている「相手」(レアティーズ)から、今までの一連の「悪企み」の次第を聞かされることになる。そこで、すべてを知ったハムレットは、「……切先きに毒まで塗ってあったのだな……それならば、猛毒よ、うんとかせぎ廻れ！」と言って、国王を突きさし、また、毒を盛った酒を無理やり飲ませて、国王を殺害する。ここで父親の「仇討ち」を遂げるとともに、ハムレットも毒が全身に廻ってきて、やがて死んでいくという展開である……。

## 二、謎の解明

それでは、これらは、一体、どういうことを意味しているのかと問えば、それは、登場人物のほとんど全員を殺すための「仕掛け」(仕組み)になっているということである。

つまり、作者は、登場人物全員を殺すためには、一体、どういう「展開」(ストーリー)にすれば、全員を無理なく殺せるのかを考えて、このような展開にしたということである。つまり、――まず、ハムレットは、「国王」と間違えて、オフェリアの「父親」を殺すことになるが、これこそは、全員を殺すための最初の「仕掛け」であり、それによってこそ、娘オフェリアの「発狂と水死」という展開を可能にしたとともに、フランスから帰ったオフェリアの「兄」には、まさに「親殺し」の仇討ちという「大義名分」を与えて、ハムレットと正々堂々とみんなが観ている前で「剣の勝負」をさせるという「舞台設定」が、まさにここに「で、き、上、が、る、」(つまり完了する)のである。しかも、剣先には毒を塗り、また、杯には毒を盛るが、これこそは、全員を殺すための第二の「仕掛け」であり、全員を殺すためには、どうしても必要不可欠な「アイテム」(小道具)になっていくのである。というのも、例えば、王妃を殺すには、一体、どうしたらよいのか？ ふつうの展開では殺せない。そこで、作者は、ハムレットが「二勝」したあと、王妃に、あれは汗っかきだからと言わせて、「……ハムレット、このハンカチで額をよく拭きなさい」と、ハンカチをハムレットに渡してから、テーブルに歩み寄り、彼の杯をとり上げ、「……わたしはお前の幸運を祝って乾杯しますよ」と言って、毒の盛られた杯を一口だけ飲むような展開になるのである。これは、一体、どういうことなのか？ この「展開」には少し無理があるかと思うが、作者は、恐らく、「王妃」(母親)の息子ハムレットへの変わらぬ「深い愛情」を表現しておきたかったとともに、一方では死んでもらわなければならない「存在」(つまりは「罪深さ」)でもあったということである。

さて、最後は、オフェリアの「兄」と「ハムレット」を殺さなければならないが、その場合、毒を塗った「剣」を持っているのは、「兄」(レアティーズ)だけであり、それゆえ、「兄」(レアティーズ)は、ハムレットを毒を塗った「剣」で殺すことは出来ても、「自分自身」(つまりレアティーズ)を殺すことはできない。そこで、作者は、次のような展開を思いついたのである。つまり、三番目の立合いは、勝負なしで終わるが、その時、つまり、立合いが終わって両者が離れていく時に、相手が、不意に「ほら、一本！」と言って、ハムレットの油断したところを突いて来て、ハムレットにかすり傷を負わせる。これが、まさに次の展開への「仕掛け」であり、なぜなら、ハムレットは、それに激高して(つまり「相手の卑怯な振る舞いに憤慨して」)、相手と激しく接近で争う間に相手の剣を奪って取り換えるという展開が可能になるからである。それを強調するためにも、国王に、「引き分ける、兩人とも逆上している」というような言葉を言わせるのである。

そして、今度は、ハムレットが毒を塗った「剣」を持って、「……いや、もう一度来い」と言いながら立合うことになるが、しかし、相手は、いわば「剣の上段者」であり、それゆえ、ふつうではそう簡単に「兄」(レアティーズ)を突いて、傷を負わせることはできない。そこで、再び、新たな小さな「仕掛け」を設けるわけだが、それは、突然、「王妃」が倒れるということである。そのような「緊急事態」を設けることによって、「兄」(レアティーズ)にいわば「隙」ができるとともに、その「隙」を突いて、「兄」(レアティーズ)に深い傷を負わせることが可能になるといふ展開である。――というのも、「王妃」は、なぜ毒の盛られた酒を飲んだ時に、すぐにでもその場で倒れて死ななかったのか、また、なぜ一口しか飲ませなかったのかという設定疑問が生じるが、それは、まさにこのような「展開」を作り出すための必要不可欠な「仕掛け」であったということである。

しかも、この何気ない「仕掛け」は、さらに大きな展開への「橋渡し」になるものであり、それは、倒れた「王妃」を見て、国王は、「……両人の者が血を流すのを見て、気絶したのじゃ」と言うのに対して、王妃は、「……いえ、いえ、あのお酒です。お、ハムレット、あのお酒、あのお酒！ わたしは毒害されたの」と言うせりふになるわけである。それでは、作者は、なぜ「王妃」にこのような「せりふ」を言わせる必要があったのだろうか？ それは、まさに「……父親だけではなく、母親までも、国王によって殺された」というような極めて重要な「意味合い」を持たせるためである。

そして、いよいよクライマックスへと向かって行くわけだが、その場合、作者は、まず、死にかけている「兄」(レアティーズ)に一連の「悪企み」の次第を告白させるのである。つまり、「……ハムレット、その謀反人はここにいます。ハムレット、君の命はもうない。この世のどんな薬でも君を治すことはできない。君の命はあと二十分と持たない。君を陥れた謀反の道具は君の手の内にある。その刃引きのしてない、毒を塗った細身だ。この悪企みの因果は廻り廻って、ぼく自身の身の上に振りかかって来たのだ。この通り、ぼくは倒れて二度と立てない……君の母親も毒殺された……ああ、もう駄目だ……国王だ……国王に責めがあるのだ……」と。それでは、なぜこのような「セリフ」を言わせる必要があるのか？ それは、ハムレットにしてみれば、自分の目の前でいったい何が起っているのか？ その「理由」がさっぱり分からないという「心的状態」にあったということである。そこで、「兄」(レアティーズ)に一連の「悪企み」の次第を告白させることにより、ハムレットは、初めて、それらすべてを知ることになるのである。

そして、それらすべてを知ったハムレットは、まさにすべての「恨み」(それは、父親、母親、そして、レアティーズの恨み)をも込めて、「……切先きに毒まで塗ってあったのだな！……それならば、猛毒よ、うんとかせぎ廻れ！」と言って、国王を突きさし、もちろん、それだけでは収まらず、「……うぬ、人非人の残酷非道のデンマーク王、さ、この酒を飲み乾せ」と、無理やり飲ませ、そして、「……貴様の真珠とはこれであったのか？ 母上のあとを追って失せろ！」とハムレットに言わせて、国王は、死んでいく。ここでの「展開」は、すなわち、——剣先には毒を塗り、また、杯には毒を盛って、ハムレットを殺そうと企てた「国王」自らが、その「アイテム」(小道具)によって「自ら命を落とす」ことになるという、まさに典型的な「因果応報」の形式を採っているのである。

### 三、素朴な疑問

それでは、なぜ全員を殺さなければならなかったのか？ それこそ、まさに「復讐」という行為の「罪深さ」であるとともに、まわりの人間をも「禍(不幸)」に巻き込まずにはおかない「悲劇性」を宿しているということである。それでは、なぜ「一人だけ」(つまり「ハムレットの親友だけ」)は生き残る展開になるのかと言えば、それは、このような「悲惨な事件」がなぜ起きたのか？ それを正しく語り継ぐ人間を残さなければ、これらの一連の事件の「事実や真実」などは、永遠に闇に消えてしまうからである。それは、例えば、「劇(芝居)」ではない、現実の「忠臣蔵」(赤穂浪士)でも、一人だけ生き残るような展開になっているかと思う。——とところで、極めて素朴の「疑問」として、何も「オフェリア」を殺さなくてもよかったのではないかということがあるかと思う。というのも、

兄は、結果として、ハムレットを殺すことになるのだから、これは仕方がないとしても、オフェリアは、何も悪いことはしていないのだから、生かしておいてもよかつたのではないかといいことである。もちろん、生かしておいてもよかつたわけであるが、しかし、全員が死ぬような「悲惨な惨状」を見聞きすれば、つまり、「……国王も、王妃も、父も、兄も、ハムレットも、みんな死んでしまう」ような、そういう「悲惨な惨状」を見聞きすれば、オフェリアの「健全な精神」は、それにとっても絶えきれずに、遅かれ早かれ、異常をきたして、やがては「発狂するしかない宿命」であつたということである。

さらに、もう一つの極めて素朴の「疑問」として、そもそもオフェリアの「父親」（ポローニアス）は、なぜ、ハムレットによって殺されなければならなかつたのか？ ももちろん、それは、「国王」と間違えられて、運悪く「殺されてしまう」ものではあるが。しかし、ここにこそ、作者の深い「思いや考え」などが奥深く隠されているのである。――まず、ハムレットは、「狂気」を装っている。それゆえ、様々な「狂気」を装った「行動」（言動）をしなければならぬ。しかし、それがまわりの人たちに様々な「誤解」を与えるときともに、様々な「禍」（不幸）をもたらす「原因」（要因）にもなってしまう。なぜなら、ハムレット本人は、自分は「狂気」を装っているという自覚があるにしても、まわりの人たち（他人）には、それが「本気なのか狂気なのか」、なかなか判別し難いものだからである。しかも、ここで最も大事なことは、「狂気」の真似だと言つて、「狂気」を装っている時には、その人は、一面では、まさに「狂気」に染まっているのである。――つまり、ハムレットは、「狂気」を装いながらも、一面では、「狂気」に染まっていたのである。それは、例えば、役者が、何か「極悪人」をまさに演じ切っている時には、その「人」（役者）は、一面では、まさに「極悪人」になっているのである。これらは、極めて「微妙な問題」であり、例えば、「狂気」を「装う」（演じている）時のハムレットの「心的状態」を、敢えて問えば、それは、いわば「半分は、正気を保ちながら、半分は、狂気に染まっている」という状態であり、その「割合」は、その時々々の状況に応じて絶えず変化しているものである。――例えば、正気が「七分」で、「狂気」が「三分」の場合もあれば、また、逆に、「正気」が「三分」で、「狂気」が「七分」の場合もある。それは、例えば、誰かを真似ているような時でも、全く同じような「心理的な状態」となり、例えば、「自分」が「七分」で、演じている「プレスリー」が「三分」の場合もあれば、逆に、「自分」が「三分」で、演じている「プレスリー」が「七分」の場合もあるというようなことである。そして、ハムレットは、次のようなことを「告白」することになるのである。

それは、みんなの前で「剣の手合わせ」をする前に、国王が、「……ハムレット、さあ、ここに来て、この手を取つて、わしにお前たち兩人を仲直りさせておくれ」という言葉を受けて、ハムレットが、次のように語るのである。つまり、「……レアティーズ、どうかぼくを赦してもらいたい。（中略）、君も聞いて知つていると思うが、ぼくはひどく心の病に悩まされているのだ。手荒い事をして、君の感情や名誉心をいら立たせたり、君からけしからん奴だと怒られるような振舞をしたが、それは、ほんとうにみんな狂気の所為だつ

た。レアティーズに無礼を働いたのは、決してハムレットではないのだ。ハムレットがハムレットからもぎ取られて、もはやハムレットではなくなった時に、レアティーズに無礼を働いたならば、それは、ハムレットの仕業ではない。ハムレットは、あくまでもそれを否定する。では、だれがしたことか？ それは、彼の狂気がしたのだ。……と。

もちろん、これは、ハムレットの「勝手な言い訳」とも取れるが、敢えて「ハムレットの言葉通り」に解釈してみると、それは、次のようになるかと思う。

まず、「前国王」（つまり「父親」）が亡くなる前までは、恐らく、ハムレットの「頭の中」（或いは「心の中」）には、まだこれという顕著な「憂鬱」の感情は、それほどはなかった。ところが、「国王」（つまり「父親」）が亡くなり、一月もたたない内に、「王妃」（つまり「母親」）は、よりによって、アポロンの神と半人半獣の怪物ほどの違いもあると思っていた「伯父」（父親の「実の弟」と結婚をしてしまった。そのことが、まさに「母親」への不信と「伯父」への不信、さらに「復讐」（亡霊の言葉やその他）への想いなどが、ハムレットの「心」をどこまでも深く苦しめることとなり、それが、まさに「憂鬱」の感情の直接の「原因」（要因）ともなったということである。そして、ハムレットは、それを自ら「心の病」（それは「心の中の葛藤」でもあるが、それが、結果として、ハムレットの健全な「精神状態」を、まさに「狂わせ始めた」のである。そして、それを現代の医学用語で言えば、それは、まさに「うつ病」（或いは「躁うつ病」）に近いものではないかと思う。しかも、ハムレットは、それに加えて、毎日、様々な「狂気」を装うような「行動」（言動）などを行なっていたとすれば、さらに「心の病」を悪化させた可能性も高く、時には、自分でも自分がコントロールできなくなって、まさに「言い過ぎ、やり過ぎ」てしまうような場合もあったに違いない。そのような時、つまり、自分でも自分がコントロールできないほどの強度の「精神的興奮」が生じている時には、それは、まさに「精神錯乱」状態や「心神耗弱」状態にも近いものになってしまうということである。——つまり、ハムレットは、「狂気」を装いながらも、一面では、「狂気」に染まっていたということである。もちろん、ハムレットがどこまでほんとうのことを言っているのかは分からないが、そのような可能性も「ゼロ」ではないということである。

最後に、国王（クローディアス）と内大臣（ポロニアス）との「信頼関係」、特に国王（クローディアス）は、内大臣（ポロニアス）を、まさに「全面的に信頼している」のである。それでは、その「全面的な信頼」は、一体、どこから生じて来たのか？ それは、次のようなことである。——まず、先王の突然の「崩御」、実際は、現国王の「毒殺」であるが、恐らく、内大臣（ポロニアス）は、その事実は知らないであり、それは、王妃（ガートルード）も恐らく知らないものである。つまり、毒へびに噛まれて死んだとばかり思っているのである。だからこそ、二人とも、現国王（クローディアス）にはこれという疑いを持つこともなく、現国王に全面的に寄り添うことができ得るのである。

そして、その先王の突然の「崩御」の後、例えば、先王の「葬儀」をはじめ、現国王の「戴冠式」や婚儀（結婚式）、それらに加えて、今度のノルウェー問題、その他、それらすべてを「仕切っていた」のは、まさに「内大臣」（ポロニアス）であるとともに、それらすべてがうまくいっているからこそ、現国王（クローディアス）からは、まさに「絶対的な信頼」を勝ち得ているのであり、その確かな「証しの言葉」としては、例えば、「…

：陛下はこの私をどのように思いで？」と聞くと、国王は、「……立派な忠義の臣と心得ておる」という言葉と、もう一つは、「……これまで、私がそうだと断言したこと、そうでなかった試しがありましたでしょうか？ あったならば承りたいものです」と言うのと、国王（クローディアス）は、「……わしはないと思うぞ」という言葉になるのである。

そして、今度の「ハムレットの問題」についても、次のような「絶対的な確信」を持って、次のように語るのである。つまり、「……ハムレット王子は、手短に申せば、恋を斥けられて憂うつになり、それから食欲不振、それから不眠症、それから心身衰弱、それから気がふらふらになられ、かように転落してついに御発病ということになり、目下それでうわごとを言うておられます最中、われわれ一同が悼み嘆いているわけでございます」という結論になるのである。——それでは、なぜ、内大臣（ポロニアス）は、その「判断」を間違えてしまったのだらうか？ それは、「……先王は、庭園でたまたま昼寝をしている時に、毒へびに噛まれて死んだのではなく、実は、現国王（クローディアス）によって、昼寝をしている時に、耳から劇薬を流されて殺されてしまった」という、この「事実」を知らないからである。それゆえ、ハムレット王子の「狂気」の原因は、まさに自分の娘（オフィリア）との「恋の破局」（つまり失恋）にあると見ているのである。

ところで、この内大臣（ポロニアス）は、やがて、国王と間違えられて、ハムレットによって殺害されてしまうが、それは、一見、いわば「理不尽に殺されてしまった」という展開になっているが、しかし、国王（クローディアス）と内大臣（ポロニアス）との関係は、ほとんど「一心同体的な関係」であり、たとえ先王の「毒殺の事実」は知らなかったとしても、結果として、先王の「生命と王位と王妃」とを毒殺で奪った叔父（クローディアス）を「国王」に祭り上げたのは、まさに内大臣（ポロニアス）であり、それゆえ、内大臣（ポロニアス）は、ハムレットに、一見、いわば「理不尽に殺されてしまった」というような展開になっているが、しかし、作者（シェイクスピア）にしてみれば、それもまた「天罰」という「意味合い」があったということである。

もちろん、それ以上に大事なことは、何よりも「ハムレットによって殺される」ことによってこそ、初めて、次の「展開」が可能になるということであり、もし「ハムレットによって殺される」という「展開」がなければ、そもそも『ハムレット』という作品の後半の「展開」部分が、まったく成り立たなくなってしまうほど、それほど極めて大事な「事件」（仕掛け）になっていると「いう」ことである。

\*

\*



ジュリアス・シーザー

例えば、シェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』という作品は、彼（つまり「シェイクスピア」）の数多くの「作品」のなかでは、それほど「高い評価」は得ていないのかも知れないが、しかし、その「作品」の中でも「演説」部分は、やはり「優れたもの」があるので、その「演説」部分を中心にして、ごく簡単に考察してみたいと思う。

まず、作品の全体の「内容」であるが、それを簡単に要約すると、それは、次のようなものである。――まず最初は、広場に、シーザーが登場して、何か競走などが行なわれている祭りの場面であるが、その群集のなかに、一人の占いがいて、シーザーに向かつて、三月十五日にご用心、と一度ならず二度までも言う。これが、まさに一つの不吉な「予言」となって、これから何かが起こることを暗示して、観客の心を強く惹きつける。――さて、ブルータスは、人も知る人格高潔の士であり、誰からも尊敬されていたとともに、シーザーからも特に寵愛されていた人物の一人であった。そのブルータスは、シーザーを心から敬愛はしていたが、いわゆる「王位につく」（つまり「独裁者」になる）ことは望んではいなかった。そのことがブルータスの心を悩ましていた。その日、「……空を飛ぶあの流星群、大変な明るさだ、これでは物でも読めそうだ」という、その深夜、ブルータス邸に或る陰謀を企てる人たちが訪ねて来る。それは、ブルータスを仲間に引き入れるためであり、その結果、明日、ポンペイ劇場の表廊下のところに集結ということになる。

一方、シーザー邸では、朝、「……昨夜は天も地も騒がしかった。妻が、眠ったまま、三度まで、『あつ、助けて下さい。シーザーが殺される』と叫んだ」と独り言を言う。そして、その妻（キサルパーニア）は、「……あなた、私、今まで前兆などを気にしたことはいりません。でも、今日は何か恐ろしくて。これはけつしてただごとではございません。……乞食の死ぬ時には、彗星など現れは致しません。王侯の死にこそ、矢も楯も放って告げ知らせるのです」と言う。それに対して、シーザーは、「……臆病者という奴は、本当に死ぬまでに幾度死ぬかわからん。ただ勇者は、一度しか死を味わわない。死、こればかりは免れがたい終末で、来る時には、かならず来るのだからな」と言う。しかし、妻の「切なる願い」を聞き入れて、今日は、外出はしないと約束するが、やがて、ブルータスがやってきて、妻の「夢」（それは「陛下の像がおびたしい水口から血を噴いて、その中に市民たちが、笑いながら手を浸すという夢」）は、むしろよいことの兆候だと説得されて、シーザーは、結局、元老院へと出かけることになる。

さて、いよいよその時が来ることになるが、それは、元老院において、一人のメラテスという人が、国法によって追放されている兄の、その追放赦免を願い出て、ブルータスも一緒にお願いをするが、シーザーは、断乎としてそれを受け入れない。それは、「……もしわたしが君たちであつたら、哀願されて心の動くこともあろう。だが、わしは動かないぞ。ちよūdあの北斗星、断乎不動、厳として動かぬことは、まことに全天その比を見ないあの北斗星のようにな。終始一貫してシルバの追放を主張した。そして現在も、断乎として考えは変わらない」と言う。それに対して、計画通り、こうなれば、腕に物を言わせるのだと、共和主義者の一団、そして、最後にはブルータスが刺す。それに対して、シーザーは、「……ブルータス、お前もか？ 是非もない」という言葉を遺して、息絶える。そして、「……自由だ、開放だ、圧制は倒れたぞ！ 早く行って、大声で触れる。街々を

怒鳴って廻るのだ」という展開になっていく。その後、アントニーは、ブルータスに演説する許可を得て、最初に、ブルータスが演説をし、その後、アントニーが演説をする。

その後、ブルータス側とアントニー・オクタヴィアヌス側との戦いになり、ブルータス側は、敗北してしまう。そして、紀元前四十三年、シーザーの甥に当たるオクタヴィアヌスと部下のアントニー、そして、將軍のレピズスとで、いわゆる「三頭政治」が樹立するが、將軍のシピズスは、やがて失脚をし、また、アントニーは、エジプトのクレオパトラと結んで、オクタヴィアヌスと戦うことになるが、紀元前三十一年のアクティウムの海戦に敗れて、クレオパトラは自害をして、エジプト王国は、紀元前三十年に滅亡する。そして、オクタヴィアヌスは、元老院から「アウグストゥス」（尊厳者）の称号を授け、広大なローマ帝国の、いわゆる「元首制」（実質の「帝政時代」）へと入っていくのである。

## 二、ブルータスの演説

それでは、本題である「演説」部分について、少し考えてみたいと思う。最初は、ブルータスの「演説」であり、それは、次のようなものである。「……（前略）、この会衆の中に、もし一人にてもシーザーの親友をもって任ぜられる方がおられるならば、吾輩はその人にむかって言いたい、シーザーを愛するブルータスの心は、毫も貴君のそれに劣るものではなかった。しからば、何ゆえにブルータスは、シーザーに対して刃を加えたかと、そうもし彼が詰問されるならば、吾輩の答はすなわちこうであります。——シーザーを愛するわが心の薄かったがためではない。ただローマを愛する心の、より篤かったがためにほかならないのであります。諸君、諸君は、シーザー死して、われわれ市民すべてが自由民として生きるよりも、むしろシーザー一人生きて、われわれ市民すべてが奴隷の死に甘んじようとするのでありますか？ 吾輩を愛してくれたあのシーザーを思うては、吾輩は彼のために泣き、幸運であった彼を思うては、心からそれを喜び、はたまた勇敢であった彼を思うては、衷心尊敬を禁じえないものであります。しかしながら、ただ彼の野望を知ったがゆえに、吾輩は彼を刺したのであります。彼の愛に対しては涙、幸運に対しては祝福、勇気に対しては尊敬、しかも野心に対しては死をもってこれに報いるのであります。誰かこの諸君のうちに、卑屈、自ら奴隷たらんことを希うものがありますか？ あれば、名乗り出てもraitたい。その人に対しては、いかにも吾輩相済まぬことをした。それとも諸君のうちに、蒙昧、自らローマ人たることを欲しないものがありますか？ あれば、名乗り出てもraitたい。これまた吾輩は相済まぬことをしたと思う。それともまた諸君のうちに、陋劣、その祖国を愛さないというものがありますか？ あれば、名乗り出てもraitたい、これまた吾輩は相済まぬことをした。……」と。

これは、実に見事な「演説」であり、これ以上の「演説」を望むことは、ほとんど望み得ないほどではないかと思われるものである。それでは、一体、どこがどのように「優れている」のかと問われれば、それは、次のようなところである。まず、一言で言えば、まさに誰にでもよく分かる「比較対照」の「論理展開」になっているとともに、もう一つは、殺害した対象を「むやみやたらに非難」するのではなく、むしろ「……いろいろな『優れた面』を取り上げながらも、或る決定的な『欠陥』、それは、国家にとっても、また、国民（市民）にとっても、必ずや『有害』となるがゆえに、やむを得ずそうしたので」とい

う論理展開になっている。もう少し詳しく考えてみたいと思うが、まず、「……シーザーを愛するわが心の薄かったがためではない。ただローマを愛する心の、より篤<sup>あつ</sup>かったがためにほかならないのであります」と言っている。つまり、「シーザー」（つまり「個人」）を愛する気持ちは誰にも負けないが、しかし、それ以上に「ローマ」（それは「市民や社会或いは国家」の公共）を愛する気持ちの方がより強かったからだという論理である。――それは、「シーザー」（つまり「個人の利益」）よりも、むしろ「ローマ」（つまりは「公共の利益」）の方を最優先させたということである。

次に、ブルータスは、「……諸君、諸君は、シーザー死して、われわれ市民すべてが自由民として生きるよりも、むしろシーザー一人生きて、われわれ市民すべてが奴隷の死に甘んじようとするのでありますか？」と言っている。これは、「……シーザー一人の幸せのために、われわれ市民すべてが不幸になると、シーザー一人死して、われわれ市民すべてが自由民として生きるのでは、どちらがよいのか？」という問いかけである。これは、何も特別なことでも何でもない。例えば、いわゆる独裁者が支配する「国家」というものは、まさにそういうものになるだろう。つまり、独裁者一人、或いは限られた階層の人たちだけが「自由や幸せ」を享受しているのに対して、一方、それ以外の大多数の国民たちは、まさに「自由を奪われ、様々な不幸のうちに沈んでいる」ということである。

また、ブルータスは、「……吾輩を愛してくれたあのシーザーを思うては、吾輩は彼のために涕<sup>な</sup>き、幸運であつた彼を思うては、心からそれを喜び、はたまた勇敢であつた彼を思うては、衷心尊敬を禁じ得ないものであります」と言っている。これは、まさに「シーザー」を褒め讃えている内容でもあるが、それでは、なぜそのようなことが「必要不可欠」になるのかと問えば、それは、次のような理由からである。つまり、シーザーを熱狂的に崇拜し、また、熱狂的に支持している人たちは、目の前の大群集の中にも必ず「数多くいる」はずである。だとすれば、そのシーザーの「悪口」をあれこれ露骨に言うことは、必ず、そういう熱狂的な支持者たちの極めて「強い反発」を受けることになる。だからこそ、まさに「シーザー」を褒め讃えることによって、そういう人たちの「強い反発を弱め、心を落ち着かせ、そして、最終的には、心を納得される必要がある」のである。

そこで、ブルータスは、その「切り札」として、まさに次のような演説をするのである。それは、「……ただ彼の野望を知つたがゆえに、吾輩は彼を刺したのであります。彼の愛に対しては涙、幸運に対しては祝福、勇氣に対しては尊敬、しかも野心に対しては死をもつてこれに報<sup>むく</sup>るのであります」と。それでは、その「野心」とは、一体、どういうものだったのか？ それは、次のようなことである。つまり、シーザーは、広場で、アントニウスから玩具の王冠を三度献<sup>おとこ</sup>げられるが、シーザーは、それを三度払い除ける。そのたびに大歓声<sup>おほい</sup>が上がるということがあり、それは、「……噂<sup>うわさ</sup>じゃ、明日元老院はシーザーを王位に即<sup>つ</sup>けるという話だ。そうなれば、彼奴<sup>きやつ</sup>め、このイタリアを除いては、海陸あらゆる国々に君臨するというわけだ」。つまり、明日十六日には、シーザーは、まさに「王位」（やがては「独裁者」）になる危険性があるということである。その前に、シーザーを「暗殺しよう」というのが、まさにブルータスたちの「陰謀」（計画）になるといふことである。

そして、最後の「演説」部分は、「……誰かこの諸君のうちに、卑屈、自ら奴隷たらんことを希<sup>ねが</sup>うものがありましようか？ あれば、名乗り出てもらいたい。その人に対しては、いかにも吾輩相済まぬことをした。それとも諸君のうちに、蒙昧<sup>もうまい</sup>、自らローマ人たること

を欲しないものがありましたでしょうか？ あれば、名乗り出てもらいたい。これまた吾輩は相済まぬことをしたと思う。それともまた諸君のうちに、陋劣ろうれつ、その祖国を愛さないことをした。しばらく諸君の返答を待とう」と言い、それに対して、群衆たちは、「……ない、ない、ブルータス、ないぞ」と言うのを受けて、ブルータスは、「……では、吾輩は誰にも相済まぬことをしたのではない。……」という展開に持っていくのである。この「演説部分」は、同じような「内容の言葉」を何度も何度も繰り返すことになるが、これは、まさに「はつきりと印象づけるため」であるとともに、演説を聴いている数多くの群衆たちの「そうだ！ そうだ！」という気持ちを、どこまでもかき立てるための、いわば「常套手段」である。つまり、同じような「言葉」（キーワード）を何度も何度も繰り返すことによって、聴いている人たちの「頭の中」（或いは「心の中」）にそれが「潜在意識」として蓄えられるとともに、その場の数多くの群衆たちの「そうだ！ そうだ！ そうだ！」という気持ちを、どこまでもかき立てるための最も有効な「方法」になるといえることである。

ところで、ブルータスの最大の「誤算」（失敗）は、一体、どこにあったかを問えば、それは、まさにアントニーに「演説」を許したということである。しかも、ブルータスが、最初に「演説」を行ない、そして、その後に、アントニーが「演説」を行なうという形になっている。この「順番」こそは、まさに最大の「誤算」（失敗）を生み出す要因にもなっている。——すなわち、ブルータスの「演説」だけであつたならば、あるいは「企ては成功していた」かも知れない。それほどまでにブルータスの「演説」それ自体は、まさに「完璧」そのものであり、それゆえ、目の前の数多くの群衆たちを納得させることにも十分に成功している。ところが、その後に行なつたアントニーの「演説」によつて、あつという間に「群衆の心理」は、まさに一変してしまうのである。

それは、なぜか？ それは、少し前に話したブルータスの「演説」が、どれほど「優れた内容」であつても、今、現に話しているアントニーの「演説」、その「生の言葉」、その「生の声」の方が、遙かに「生々しく」、遙かに「説得力」を持つて聞こえて来るといふ、この「事実」を、ブルータスは、見逃しているのである。——つまり、「順番」こそは、最も大事な「要素」の一つであり、「前」に話すよりも、「後」で話すほうが、遙かに「有利な立場」に立っているのである。それは、なぜか？ それは、まず、相手の「話」を聞いた後なので、相手の話の「不備や欠陥」などをどこまでも攻撃でき得るとともに、そもそも「前」の「演説」というのは、すでに「過去」のものであり、それゆえ、その「記憶」もどんどん薄れて行くばかりであるが、一方、「後」に行なう「演説」というのは、まさに「今」であり、今、話しているアントニーの「演説」、その「生の言葉」、その「生の声」の方が、遙かに「生々しく」、遙かに「説得力」を持つて聞こえて来るので、数多くの群衆たちは、そのアントニーの「演説」の「話の中」にどんどん引き込まれて、それに支配される一方、「前」のブルータスの演説などは、どんどん忘れ去られていくばかりである。しかも、アントニーの「演説」が、まさに「より魅力的で、より説得力に」富めば富むほど、そのような「傾向」は、ますます強まるというようなことである。

### 三、アントニーの演説

では、今度は、アントニーの「演説」部分を見てみたいと思うが、それは、かなり長い「演説」などで、その「主要部分」だけを取り出して考えてみたいと思う。それは、次のようなものである。「……友人諸君、ローマ市民諸君、わが同胞諸君、(省略)、シーザーは私の友人、しかも公正信実なる友人でありました。もつともブルータス君は、彼が野望をいだいていたと言われます。そしてブルータス君は、人格高潔の士であります。シーザーは、おびただしい俘虜をローマへ連れて帰りました。そしてその身代金は、すべて国庫に納められたのであります。このシーザーが野心家と見えたのでありましようか？ 窮民たちが泣き叫んだ時、シーザーもともに泣きました。野心というものは、もつと冷酷な心から生まれるものであります。もつともブルータス君は、彼が野望をいだいたと言われます。そしてブルータス君は、人格高潔の士であります。諸君もみんなご覧になったであります。あのリューパーカルの祭に、私は三度まで、彼に王冠を捧げたのであります。彼は三度までそれを拒みました。これが野心でありましようか？ もつともブルータス君は、彼が野望をいだいたと言われる。そしてブルータス君は、人も知る人格高潔の士であります。私はブルータスの言葉を反駁する目的で、言っているではありません。ただ私の現に知っていることを述べるために、立っているであります。……」と。

さて、ここまでは、ブルータスの「野望」という「言葉」(キーワード)に対して、ほんとうに「シーザーは、野心家だったのか？」と、幾つかの「実例」を上げて、疑問を投げかけている。つまり、まさに「潰しかかっている」のである。なぜなら、この「野望」という「言葉」(キーワード)さえ潰せれば、シーザーを殺害したその「大義名分」が、まさに「根底から覆る」ことになるからである。また、同じ言葉の「繰り返し」は、その「演説」に畳みかける「リズム」を与えるときにも、言葉の意味とは裏腹に、ほんとうにそうなのかという疑念を、より強く投げかける「効果」もあるということである。そして、群衆たちが、「……彼の言うことにも、なかなか道理はあるようだ」、また、「……シーザーのほうこそ、飛んだひどい目に遇ったということかも知れない」と思わせておいて、アントニーは、ここでまさにとっておきの「切り札」を出して来るのである。

それは、「……ここにシーザーの捺印のある一枚の文書があります。彼の物入れの中から発見したものであります。遺言状であります」と。それに対して、群衆は、「……遺言状だ、遺言状だ！ シーザーの遺言状を聞こう」となる。ところが、アントニーは、なかなか遺言状を読もうとはしない。その理由は、「……親愛なる市民諸君、まあ待つていただきたい。読んではいけないのです。いかにシーザーが諸君を愛していたか、それを諸君が知ることは、よろしくないのです。シーザーの遺言を聞けば、諸君は激高し、狂気のごとくなるであります。彼の遺産相続者はじつに諸君自身である。などということ、諸君は知らないほうがよいのです。なぜならば、白刃をもってシーザーを刺した、あの人格高潔の国士諸君を、あるいは誣(し)むることになるのではありますまいか。それを惧(おそ)れるのです」と。それに対して、群衆は、「……フン、人格高潔の国士か！ 奴(やつ)らこそ反逆人だ！」「……悪党だ。人殺しだ。遺言状だ、遺言状を読め！」と騒ぎ立てるのである。

もちろん、それが「狙い」であるが、それは、「……熱狂する群衆とは、言葉一つでどちらにも転ぶ」ということである。——例えば、ライブステージなどから、上着を脱ぎ捨て、裸になろうと、大声で叫べば、恐らく、多くの若者たちは、実際に上着を脱ぎ捨て、裸になるだろう。それが、まさに「群衆心理」というものである。つまり、本来の「知性

や理性」などに強く支配された冷静な「判断能力」などは、極端に弱まってしまい、本来ならば、まさに「抑制」が利いているはずのものが、その「抑制」のたがが外れているのである。それゆえ、例えば、一般の「デモ行進」なども、やがて感情にまかせた「暴動」へと、まさに「言葉一つでどちらにも転ぶ」ということである。

さて、群集の人たちの「心」をじらし、そして、その遺言の「内容」へとより強い「興味や関心」を持たせてから、「……では、どうしても遺言状を読めと言うのですね。では、このシーザーの遺骸のまわりに、輪になつていただきたい」と言う。それは、まず、そのシーザーの血にまみれた「無残な亡骸」を見せてから、いよいよ「遺言状」を読み上げるといふ「段取り」になるが、それでは、なぜ、そのような「段取り」を踏むのか？ それは、ただ単に「遺言状」を読むだけでは、やはり「説得力に乏しい」からである。それゆえ、シーザーの血にまみれた「無残な亡骸」を見せてから、シーザーの「遺言状」を読み上げ、そして、シーザーは、こんなにも君たちのことを愛していたのだということによつて、遙かに「説得力が高まる」とともに、白刃をもってシーザーを刺した人たちへの「恨みや憎しみ或いは復讐心」などを煽る決定的なものになるからである。それは、つまり、これほどまで自分たち（市民たち）のことを愛してくれたシーザーを無残に殺害した人たちは、まさに「絶対に許せない」という気持ちへとかりたてることができ得るからである。

そして、そのシーザーの「遺言状」の「内容」とは、次のようなものである。「……さあ、これが遺言状です。ちゃんとシーザーの証印のある。それは、——ローマ市民一人残らず、めいめい各人に、彼は七十五ドラクずつを贈っております。その上になお彼は、タイバー河のこちら岸にある彼所有の莊園のいっさい、すなわち自家の庭園、新たに開いた花園などをすべて、諸君のために遺しています。いや、諸君のためばかりではない。諸君の子々孫々永久に、逍遙、慰安のための公共娯樂地として遺してくれているのであります。じつにシーザーは、かくのごとき人物でありました。いつまたかかる人物が現れるでありましょう！」と。それに対して、群集は、「……絶対にないぞ、さあ、出発だ！ 齋場へ行って、シーザーの遺骸を火葬にしたら、その焼棒杭で、反逆者どもの家に火を放けるのだ」と。そして、アントニーは、「……さあ、あとは勢いだ。復讐の鬼め、動き出したな、どつちへ行こうと、あとは貴様の気まかせだ！」ということになる。しかも、この「勢い」という言葉を軽く読み流してはいけない。なぜなら、勝敗を分かつのは、まさにこの「勢い」だからである。——つまり、「強い」から、必ず、「勝つ」のではない。そうではなく、いわゆる「勢い」（それは「気力・武力・知力の勢い」）のある方が、まさに必ず、「勝つ」ということである。

#### 四、リンカーンの演説

ところで、「演説」ということで最も有名なものは、まさにリンカーンの「ゲティスバーグでの演説」ではないかと思う。しかも、最後の、「……人民の、人民による、人民のための政治」という言葉は、極めて多くの人たちがよくご存知だろうと思うが、しかし、その「全文」を一度でも読んだ人がどれほどいるだろうかと考えた時に、恐らく、極めて少ないのではないかと思う。そこで、敢えてここではその「全文」を引用して、この「演説」のどこがどのように優れているのかを、少しばかり考えてみたいと思う。

まず、その「演説」であるが、それは、一八六三年十一月十九日の、まさに「南北戦争」（一九六一年〜一九六五年）のまったただ中であり、場所は、ペルシルヴァニア州ゲティスバーグにおける国有墓地（それは、この地で激戦があり、その戦没勇士に献ずるための国有墓地）の献納に際しての「演説」であり、その「全文」は、次のようなものである。

\* \*  
八十七年前、われわれの父祖たちは、自由の精神にはぐくまれ、すべての人は平等にくられているという信条に献じられた、新しい国家を、この大陸に打ち建てました。

現在われわれは一大国内戦争のさなかにあり、これによりこの国家が、あるいはまた、このような精神にはぐくまれ、このように献じられたあらゆる国家が、永続できるか否かの試練を受けているわけであります。われわれはこの戦争の一大激戦の地で相い会しています。われわれはこの国家が永らえるようにと、ここでその生命を投げ出した人々の、最後の安息の場所として、この戦場の一部を献ずるために来たのであります。われわれがこのことをするのはまことに適切であり適当であります。

しかし、更に大きな意味において、われわれは、この土地を献ずることはできません——聖め献ずることができません——聖別することができません。生き残っている者と戦死したものとを問わず、ここで戦った勇敢な人々こそ、この場所を聖め献じたのであります。われわれの微力をもってしては、それに寸毫の増減も企てがたいのであります。

われわれがここで述べることは、世界はさして注意を払わないではありません。また長く記憶することもありません。しかし彼らがここになしたことは、決して忘れられることはないであります。

ここで戦った人々が、これまでかくも立派にすすめて来た未完の事業に、ここで身を捧げるべきは、むしろわれわれ自身であります。われわれの前に残されている大事業に、ここで身を捧げるべきは、むしろわれわれ自身であります。——それは、これらの名譽の戦死者が最後の全力を尽して身を捧げた、偉大な主義に対して、彼らの後をうけ継いで、われわれが一層の献身を決意するため、これら戦死者の死をむだに終らしめないように、われらがここで堅く決心をするために、またこの国家をして、神のもとに、新しく自由の誕生をなさしめるため、そして、人民の、人民による、人民のための、政治を地上から絶滅させないため、であります。

\* \*  
これは、やはり、実に素晴らしい「演説」であり、それを、一言で言えば、最初から最後まで、徹底して、「……むだな言葉、むだな動き、そして、むだな飾り（誇張）」などの全くない、まさに自然の「川」の水の流れのように自然であり、しかも「言わんとする想い」が、すべて「言い尽くされている」ということである。

それでは、もう少し詳しく考えてみたいと思うが、まず、「全文」は、大きく分けて、次の「三つの部分」に分けられるかと思う。一つは、そもそもアメリカとは、一体、どういふ国家なのか？ その生い立ちと、その国家が「信条」とするものは、一体、何なのか、ということである。次に、この国家が「信条」とするもののために、この地にその尊き「生命を捧げられた人たち」への、まさに「感謝と鎮魂」の言葉であります。そして、もう一つは、生き残っているわれわれが、これからなすべきことは、一体、何かということであり、その「決意と決心」とを戦没者の前で、誓うということである。



\*

\*

まず、冒頭で、「……八十七年前、われわれの父祖たちは、自由の精神にはぐくまれ、すべての人は平等につくられているという信条に献じられた、新しい国家を、この大陸に打ち建てました」とある。これは、アメリカという国（国家）とは、まさに「自由と平等」とを「信条」とする国家であるということの再確認である。それでは、なぜ「再確認」が必要なのか？ それは、まさに「奴隷制」の問題があるからである。つまり、「……すべての人は平等につくられているという信条」を掲げている国家において、いわゆる「奴隷制」をこのまま黙認することは、どうしても「矛盾が生じる」ということである。

次に、「……現在われわれは一大国内戦争のさなかにあり、これによりこの国家が、あるいはまた、このような精神にはぐくまれ、このように献じられたあらゆる国家が、永続できるか否かの試練を受けているわけでありませう」とある。もちろん、ここでの戦争とは、まさに「南北戦争」であるが、それでは、なぜ「南北戦争」は起きたのか？ それは、次のような理由からである。まず、「南部」各州は、多くは「大農園」を中心とした産業であり、それゆえ、そこでの労働力不足を補うために、アフリカから大量の「奴隷」を輸入していたということである。それゆえ、「奴隷制」廃止は、南部にとっては、大きな痛みになるものである。一方、「北部」各州は、多くは「商工業」などを中心とした産業であり、それゆえ、「奴隷制」は、特に必要不可欠なものではなく、むしろ「人権問題」から、反対をしていたのである。そして、最大の「問題」となるのは、一八六〇年、「奴隷制」に強く反対していた共和党の「リンカーン」が大統領になった時に、「南部」の十一州は、それに反対して、合衆国から脱退をして、新たに『アメリカ連邦』を結成し、ジェフアンソンを大統領にして、激しく対立したということである。これは、まさに「国家を二分する」「最大の危機」であり、それゆえ、容認はできないということから、やがて「南北戦争」が勃発するということである。

さて、次は、「……この国家が永らえるようにと、ここでその生命を投げ出した人々の、最後の安息の場所として、この戦場の一部を献ずるために来たのであります。（省略）、そして、それは、ここで戦った勇敢な人々こそ、この場所を聖め献じたのであります、われわれの微力をもってしては、それに寸毫の増減も企てがたいのであります」とある。この部分は、まさに国家の「信条」である「自由と平等」のために、また、このままでは「国家が二分される危機」回避のために、尊き「生命を捧げられた人たち」への、まさに心からの「感謝と鎮魂」の言葉になっているということである。

そして、最後は、「……ここで戦った人々が、これまでかくも立派にすすめて来た未完の事業に、ここで身を捧げるべきは、むしろわれわれ自身であります。われわれの前に残されている大事業に、ここで身を捧げるべきは、むしろわれわれ自身であります。——それは、これらの名譽の戦死者が最後の全力を尽して身を捧げた、偉大な主義に対して、彼らの後をうけ継いで、われわれが一層の献身を決意するため、これら戦死者の死をむだに終らしめないように、われらがここで堅く決心をするために、またこの国家をして、神のもとに、新しく自由の誕生をなさしめるため、そして、人民の、人民による、人民のための、政治を地上から絶滅させないため、であります」とある。これは、まさに生き残っているわれわれが、これからなすべきことは、一体、何かということであり、その「決意と決心」とを戦没者の前で誓うということである。——つまり、「自由と平等」とを信条

とする「国家」というものが、果たして実際に実現可能なことなのか？ それも、今、まさにここで試されているなかで、生き残っているわれわれは、名誉ある戦死者たちの遺志をしつかりと受け継ぎ、そして、その真に「自由な国家の誕生」のために、全力を尽くして戦うことを固く誓うということである。

## 五、結び

最後に、有名な「……人民の、人民による、人民のための、政治を地上から絶滅させないためであります」とあるが、これは、一体、どのような「意味合い」になるのかと敢えて問えば、それは、次のようなことである。——つまり、まず、「人民」というのは、英語では「people」であるが、それは、例えば、「王、貴族、軍人、富裕層ふゆうそう、平民、その他」などの「身分制度」などはすべて排除された、まさに「すべて等しく同じ人間である」という「意味合い」を持つものである。

例えば、「……王の、王による、王のための政治」であれば、それは、「王政」であり、また、「……貴族の、貴族による、貴族のための政治」であれば、それは、「貴族制」であり、また、「……軍人の、軍人による、軍人のための政治」であれば、それは、「軍国制」であり、また、「……富裕層の、富裕層による、富裕層のための政治」であれば、それは、「金権制」であり、そして、「……人民の、人民による、人民のための政治」であれば、それこそ、まさに「民主政」であるが、しかし、それは、ある一部の「人民」のたみだけではなく、それは、まさにすべての「人民のための政治」である時に、初めて、いわゆる真の「民主政治」となるのである。

\*

\*

「参考文献」

- ※底本「ハムレット」市河三喜・松浦喜一訳（「岩波文庫」）
- ※底本「ハムレット」小田島雄志訳（「白水Uブックス」）
- ※底本「ジュリアス・シーザー」中野好夫訳（「岩波文庫」）
- ※底本「リンカーン演説集」高木八尺・斉藤光訳（「岩波文庫」）